

78 誌上発表 『経験漢方処方大成』について

坂田 幸治, 小林 義典, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【目的】当研究所編『漢方処方集』は約束処方集として昭和51年3月に初版が作製されて平成24年7月刊行の第7版に至る。基となったというべき『経験・漢方処方分量集』（大塚敬節・矢数道明監修）は『経験漢方処方大成』（大塚敬節・木村長久・矢数道明監修）を増補改訂したものである。今回、昭和16年に刊行された『経験漢方処方大成』の特徴や収載処方の引用出典もしくは著者名について調査し、現代の漢方界に及ぼした影響を考察する。

【方法】『経験漢方処方大成』の構成及び収載処方の引用出典もしくは著者名を調査した。また、『経験・漢方処方分量集』（第8版：平成元年7月刊行）収載の同処方の出典について比較検討した。

【結果】本書は気賀林一によって『漢方と漢薬』刊行以来8年間誌上掲載の処方と拓殖大学漢方医学講座教材中にある処方と他の有名処方を集め、大塚敬節・矢数道明・木村長久の監修のもと、分量査定を行った処方集である。処方数は632、湯剤のほか、丸、散、丹、軟膏剤等が収載。構成は処方がアイウエオ順に列挙され、処方名、出典名もしくは著者名、構成生薬及び各分量、湯剤以外の剤形には製法が付記されている。引用出典もしくは著者名は多い順に『金匱要略』（138）、『傷寒論』（115）、『万病回春』（50）、『和剂局方』（35）、『校正方輿輓』（19）、『本朝経験方』（19）、引用出典無し（18）、千金方（17）、济生方（13）、外台秘要方（13）、浅田方函（12）、原南陽（9）、外科正宗（9）、吉益東洞（7）、寿世保元（7）、華岡青洲（7）、内科秘録（5）、一貫堂医学大綱（4）、温疫論（4）、三因方（4）、医学入門（4）、牛山活套（3）、撮要（3）、直指方（3）、太平聖恵方（3）、聖濟総録（3）、高階枳園（3）、衛生宝鑑（3）、古今医鑑（2）、医学正伝（3）、傷寒蘊要（2）、香川修庵（2）、産科発蒙（2）、時方歌括（2）、儒門事親（2）、証治準繩（2）、証治大還（2）、千金翼方（2）、医学統旨（2）、山脇東洋（2）、吉益南涯（2）、宣明論（2）、弁惑論（2）、東垣（2）、保命集（2）、楊氏家蔵方（2）、蘭室秘蔵（2）、名古屋玄医（2）、張介賓（2）、薛氏（2）、薛己十六種（2）、外科枢要（2）、多紀樸窓、赤水玄珠、医皇元戒、医方考、飲病論、大阪小山忠兵衛伝、会解、活法機要、黴瘡約言、感証集腋、奇効良方、橘窓書影、木村博昭、近製、栗山家、兼康方、古今医鑑、産宝、産論、集験良方、小児直訣、中西深斎、全生集、試効、端竹、肘後方、張氏医通、通雅、蔓難録、提耳談、道三、一溪、得効方、内科摘要、黴癘新書、拔萃、和田東郭、秘方集験、百一、廣筆記、福井楓亭、腹証奇覧、婦人良方、本事方、名家方選、養壽院方、葉氏録験方、良筑、傷寒六書、療治大槩、和田啓十郎等であった。その占める割合は中国約78%、日本約19%、不詳3%であった。引用が無い処方には合方処方や加味処方が多く含まれた。しかし、その一部は『経験・漢方処方分量集』で追加され、葦茎合四順湯（勿誤薬室方函）、芍薬湯加大黄（保命集）等が挙げられる。異名同処方も数組認められ、補中益気湯（医王湯）、三黄瀉心湯（瀉心湯、三黄湯）、八味地黄丸（八味丸・腎気丸）、柴胡桂枝乾姜湯（柴胡姜桂湯）等があった。

【考察】本書は漢方医家実際使用の処方と臨床で用いた標準的な分量が収載されており、信頼に足る漢方処方分量集といえ、昭和初期の漢方処方の分量は本書が規準の一つと考えられる。これは現代の多くの処方集に継承されており、引用出典の明記により原典に当たって処方運用を詳細に知る便を図った処方集の基となった。また、同年刊行された『漢方診療の実際』（大塚敬節・矢数道明・木村長久・清水藤太郎共著）には処方集篇として処方名と構成生薬及びその分量が付記されているが、その多くの処方に出版が明記されていなかった。本書は引用出典と生薬分量を明記した処方集として後世の漢方界に多大な影響を与えたと考えられる。